

串間市文化財調査報告書 第5集

三幸ヶ野第2遺跡

県営農地保全整備事業三幸ヶ野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1991

宮崎県串間市教育委員会

序

本報告書は、県営農地保全整備事業（三幸ヶ野地区）に伴い、平成2年度に実施した事業地内に所在する三幸ヶ野第2遺跡の発掘調査概要報告書です。

今回の調査では、縄文草創期から縄文早期にかけての土器が出土し、特に縄文草創期の土器は数的に多く、また、質的にも優れており、大きな成果をあげることができました。

発掘調査で得られた成果は、先人が残した私達の貴重な文化財産であり、これらの成果をまとめた本報告書が文化財の保護・保存に活用され、また、学術資料として社会教育、学校教育等の場で広く活用していただければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり積極的な御協力をいただいた宮崎県教育庁文化課、南那珂農林振興局、三幸ヶ野土地改良区等、各関係機関をはじめ地元市民の皆様に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成3年3月

串間市教育委員会 教育長 武田久文

例 言

1. 本書は、宮崎県串間市三幸ヶ野地区における県営農地保全整備事業に伴い、平成2年度に実施した三幸ヶ野第2遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は串間市教育委員会が主体となり、同主事 富田浩二が担当した。
3. 調査組織は以下の通りである。

調査主体 串間市教育委員会

教 育 長 武 田 久 文

社会教育課長 松 本 松 文

文 化 係 長 野 下 賢 良

調 査 担 当 宮 川 浩 二

調 査 指 導 而 高 哲 郎 (県文化課主査)

4. 本書の執筆・編集は宮田が担当した。
5. 本書中の方位は磁北である。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 遺跡の位置と調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 三幸ヶ野第2遺跡の調査	2
1. 調査の概要	2
2. 層 序	2
3. 縄文時代早期の遺構	4
4. 縄文時代早期の遺物	4
5. 縄文時代草創期の遺構	7
6. 縄文時代草創期の遺物	7
7. まとめ	11

挿 図 目 次

I - 1 遺跡位置図	1
II - 1 基本層序模式図	2
II - 2 遺跡概要図	3
II - 3 早期遺構写真及び実測図	5
II - 4 早期遺物拓本及び実測図	6
II - 5 草創期遺構写真及び実測図	8
II - 6 草創期遺物及び出土状況写真	9~12

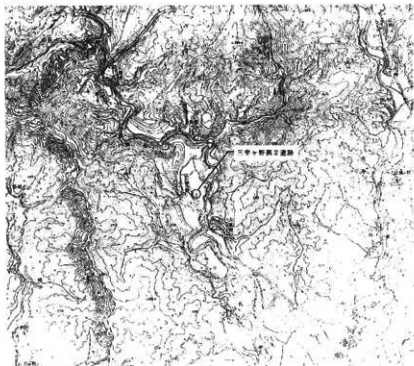
第I章 序 説

1. 遺跡の位置と調査に至る経緯

三幸ヶ野第2遺跡は、宮崎県串間市大字一氏字三幸ヶ野に所在し、福島川の支流である大矢取川の左岸（西側）に形成される約20haの台地上（標高約85m 通称三幸ヶ野原）のほぼ南端に位置する。

宮崎県串間市では、昭和62年度から南那珂農林振興局が実施する県営農地保全整備事業が行なわれており、この内、三幸ヶ野地区の台地が平成2年度の工事予定となっていたため、平成元年度、県文化課による事業地内の分布調査ならびに試掘調査が実施された。この結果、台地上に遺跡が点在することが確認されたため、南那珂農林振興局、三幸ヶ野土地改良区、県文化課及び市教育委員会で文化財保護についての協議を行ない、事業施工上現状保存が困難な部分について記録保存の措置をとることとなった。

今回の調査は、串間市教育委員会が主体となり、同主事宮田浩二の担当、県文化課主査面高哲郎の調査指導により、平成2年9月27日から平成3年3月25日まで行なわれた。



I - 1 遺跡位置図

第Ⅱ章 三幸ヶ野第2遺跡の調査

1. 調査の概要

三幸ヶ野第2遺跡では、調査対象面積4,000㎡のうち、北側の約1,000㎡をA地域として10mグリッドを6区画、南側の約3,000㎡をB地域として10mグリッドを13区画設定して、各グリッドごとに調査を実施した。

A地域では、後述する縄文時代早期の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層を中心に調査を実施した。包含層の残存状況は割に良く、特にⅢ層で集石遺構の数、遺物の出土量が多かった。

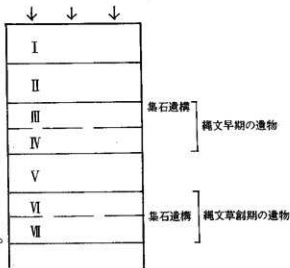
B地域では、縄文時代早期の遺構、遺物も良好に出土したが、縄文草創期の遺物包含層であるⅥ・Ⅶ層の調査が中心となった。調査方法として、V層(桜島パミス)がどのグリッドでも全面的に残存していることから、V層表面で掘り下げを一旦停止し早期遺物を取り上げた後、あらためてV層以下を調査する方法を取った。縄文草創期の遺構、遺物はⅥ層表面に多く見られ、また、区画的には、B-9・10区で集石遺構が各1基検出され、B-3・6・9区において遺物が特に出土した。

尚、遺跡の現地形はほぼ平坦であるが、旧地形は遺跡のほぼ中央を境に東・西・南の三方に向け緩やかに傾斜している。

2. 層 序

今回の調査の基本層序については、耕作土のⅠ層から、黄褐色で下層になるほど礫が多くなるⅣ層までを確認した。なお、その下層にはシラスが厚く堆積している。

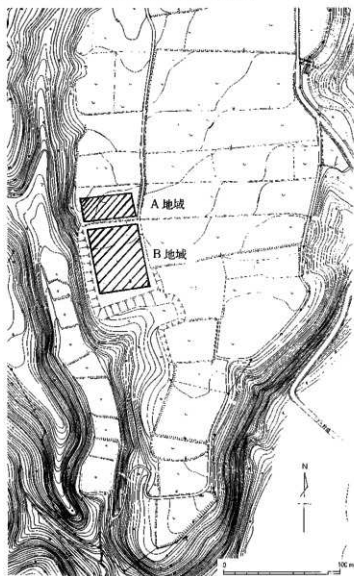
Ⅱ層・「アカホヤ」火山灰層は、遺跡の東側および南側に進むほど厚く堆積し、その下層のⅢ層・黒褐色土、Ⅵ層暗褐色土で縄文早期の遺物が出土する。



Ⅱ-2 三幸ヶ野第2遺跡基本層序模式図

V層・桜島パミスは硬質で黄褐色を呈し、約15~20cmの厚さで遺跡全体に堆積する。さらにその下層のVI層・黒褐色土、VII層・暗褐色土で縄文草創期の遺物が出土するが、B地域で西側に進むほどVI・VII層が明確でなくなり、色調が明るくなってゆき、遺物が少なくなるという傾向も見られた。

尚、III層からIV層へ、VI層からVII層への色調の変化は漸移的で、その境界は明確ではない。また、遺跡内の一部（B-2区付近）では、V層上部までが耕作による削平を受け、消滅している部分も見られた。



II-2 遺跡概要図

3. 縄文時代早期の遺構

Ⅲ層表面およびⅣ層の縄文早期包含層で検出された遺構は、集石遺構が27基であった。特徴としては、第一に、全体的にしっかりと掘り込みを有していることで、これらの掘り込みはほとんどがⅤ層（桜島バミス）の上部ないし中部で止まっている。第二には、集石内の礫が小さいことがあげられ、礫は加熱されたものと思われ赤く変色しており、もろい。また、石質は砂岩質で遺跡付近の産出のものと思われる。第三には、遺構の大きさが様々であることがあげられ、最小のものは直径が約50cmで、最大のもの（次頁写真集石11号）で直径約180cmであった。

なお、集石11号は、掘り込みの深さに関しては例外的で、約50cmの掘り込みを持ち、層的にはⅥ層中部に達しており、約2500個の小礫で構築されている。また、上述の特徴を備えた例として、次頁実測図の集石12号を掲載した。

4. 縄文時代早期の遺物

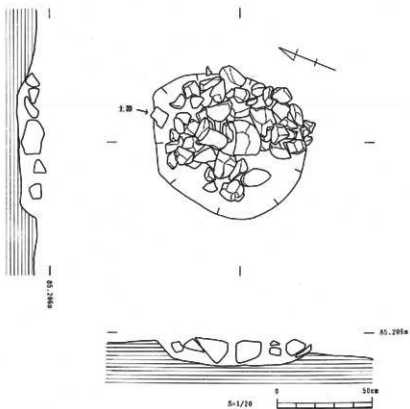
遺物としては、土器片を中心に石鏃等の石器や剝片が数点出土した。

土器は、円筒形で胴部に横位または斜位の貝殻条痕を施したもの（1、3）が多く、口縁部にW字状の貝殻腹縁文を施したもの（2）、大きく外反する口縁部に縦位に連点を施したもの（4）、また、貝殻条痕の上から縦に蛇状の沈線（5）等が出土している。なお、図示していないが、手向山式系統の土器片も数点出土した。

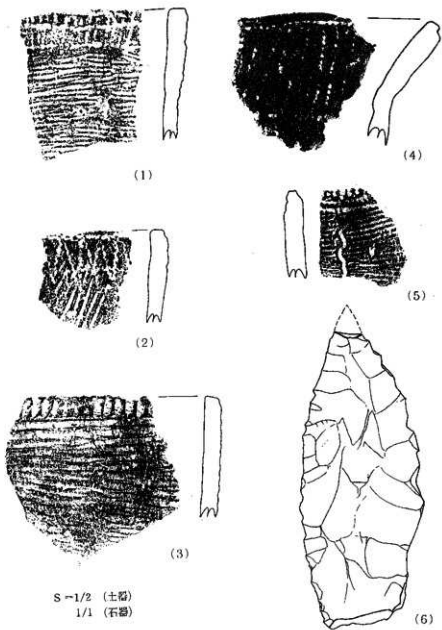
石器では、チャートを石材とした打製石鏃が2点出土したのをはじめ、図示（6）の石器、黒曜石や石材不明の剝片が数点、その他、使用痕の見られるすり石等が出土している。



Ⅱ - 3 集石11号検出状況写真



Ⅱ - 3 集石12号実測図



II - 4 早期遺物拓本及び実測図

5. 縄文時代草創期の遺構

縄文時代草創期の包含層であるⅥ・Ⅶ層での遺構は、土坑1基、集石遺構2基をそれぞれ確認した。

土坑はⅦ層表面で現われ、楕円形を呈しており、Ⅶ層底部あたりまで掘り込んであった。土坑内部の上部からは微量の炭化物が出土し、また、中部からは土器小片が出土した。土器は無文であったが、土坑の表面上部にはⅤ層（桜島バミス）が一面に堆積しており、後の時代の影響を受けた形跡は見られなかった。

集石遺構は、次頁に掲載した28号と29号の2基が検出されたが、28号は明確ではないが浅い掘り込みを持ち、小礫がスリパチ状に配してある。礫は加熱を受けたものと思われ赤く変色しており、石質は砂岩質のものが多い。29号は割に大きめな砂岩質の礫で構築されており、浅い掘り込みを有している。礫は28号と同様に変色しており非常にもろい。なお、29号付近からは土器小片が出土した。

また、目的等は不明だが、扁平な石が6個、ほぼ直線上に並んでいる個所も見られた。

6. 縄文時代草創期の遺物

遺物としては、土器が多量に出土した他、黒曜石も多く、石質不明の剥片やスリ石等が出土した。

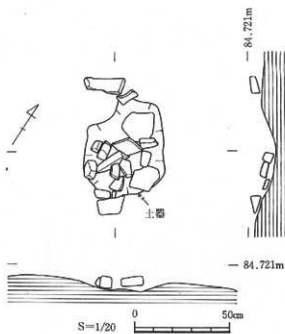
土器は、数的には無文のものが多いが、注目されるのは隆帯文を施した土器片がかなりの量、まとまって出土したことである。隆帯文は大きく3つのタイプに分類できるが、その第1は口縁部に2本ないし3本の隆帯文が施され、その間にハの字型の爪形が見られるもので、このタイプには口唇部に花びら状の押圧文が見られるものが多い。第2のタイプは細めの隆帯文を1本ないし2本施したもので、口唇部の底部にかすかな爪形の見られるもので、このタイプには口唇部の押圧文は見られない。そして、第3のタイプには細めの隆帯文を口縁部に2本ないし3本施して、口唇部に花びら状の押圧文を有するものがある。なお、土器の厚さは、第1のタイプに対し、第2・第3のタイプが薄い。

その他、円形と思われる平底の底部も1、2点出土した。

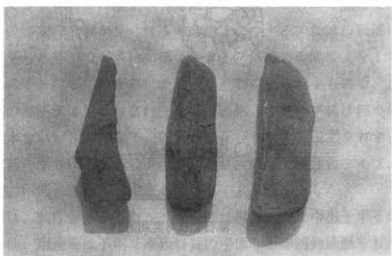
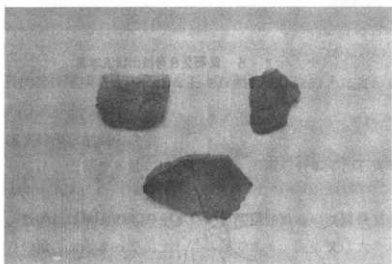
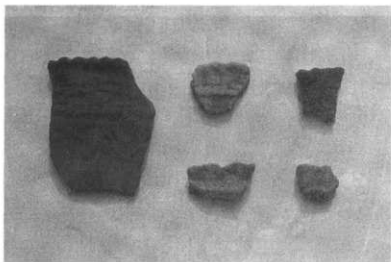
石器類は、剥片が多かったが、部分的に黒曜石が集中出土する地点も見られた。その他、用途等は不明だが砂岩質の平偏な石や四角錐形をした石が多く出土している。



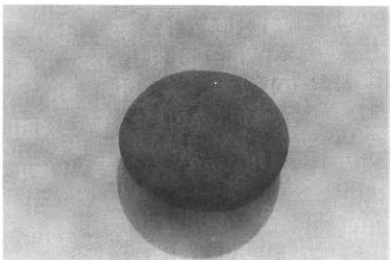
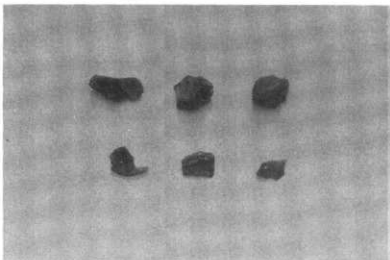
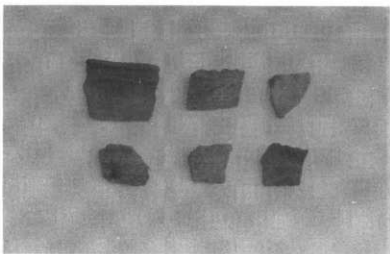
II - 5 集石28号検出状況写真



II - 5 集石29号実測図



草創期遺物写真



草創期遺物写真



草創期遺物出土状況写真



7. まとめ

今回の調査では、縄文時代早期、縄文時代草創期ともに遺物包含層の残存状況が割に良く、住居址は認められなかったものの、遺物については成果をあげることができた。特に、縄文時代草創期の遺物は、量的に多く、そのほとんどが桜島バミス直下からの出土であり、地層的には明確に把握することができ、その様相から、層的に遺物の時期的な幅は割に狭いような印象を受けた。

しかしながら、土器の編年や桜島バミスに関する考察を含め、今後の十分な検討が必要であり、その上での詳細な報告は本報告書に譲りたい。

参考文献

- 「縄紋草創期研究の序」 鈴木 正博（平成元年）
「草創期の土器」 大塚 達朗
「縄文土器の知識Ⅰ」 麻生 優 白石 浩之（昭和61年）